

政治経済学の批判と 方法的ユートピアの史的考察

林 喜代三

〔序〕学としては形而上学と諸科学とが成立し得る。カント批判哲学体系の礎石をなす「純粹(理論)理性の批判」はこれを扱う⁽¹⁾。一方で従来の独断的(認識能力についての吟味を欠いた)形而上学を——おそらく初期カント自身のを含めて——批判し、他方で認識の客観性の源泉・範囲を(認識能力との関連で)確定せんとする。およそ偉大な思想がそうである如く、カントの場合も論争の中から生れた。一般に批判哲学は科学(自然科学)の基礎づけをしたとされるが、一面での科学の有効領域確定の反面として形而上学の領域確定を目指したものである。科学はおよそ現象としての関数的関係概念の理解に向かい、それを超えた所には全体概念(全体と個体)を把握すべき形而上学が成立する。科学は一般化して解さるべく、形而上学は全体化して解さるべき性質のものとしてあった。ところで政治経済学は社会を「全体として」考察する学と解され得る。諸個人の共存として成立する社会の全体としての再生産を考察する。マルクスは「政治経済学の批判」体系の構築を終生の目標とした。局部認識としての科学を超えて、不断に発展する社会を全体として考察するためにその測度基準として、イデアとしての社会像が人類史の傾向把握から究極に確定したものとして構想された。この人類諸社会一切の批判基準としての社会像、即ち「方法的ユートピア」⁽²⁾の構想は、人類諸社会の批判と弁証法的な関係にあり相互に深化させ合う。ヘーゲルもカント哲学を承けて理性的なるものと現実的なるものとの弁証法的関係を把らえ、イデアとしての社会像を構想し形而上学を樹立しようとした。現実的なるものをそのまま理性的なものと考えたのでなく、前者の中に後者を見出さんとしたのだが、自らの世界史像を完結させてしまう

ことによって後者を前者の中に解消させて、批判的な機能を、現状変革的な機能を失った⁽⁸⁾。これに対しマルクスは現実と理念を混合せず、理念をあくまで理念と自覚して現状批判に活用せんとした。決して理念を捨て去ったのではなく、また現実にもみ向ったのでもない。

形而上学と科学との批判的区分は社会と科学の急激な発展を生じた近代に提示されてきた。発展の遅い準停滞的な社会では局部認識を超えた全体考察の学が比較的容易である故にその区分の要が自覚されなかった。また政治経済学という名称はなくとも社会再生産の全体考察は存在したが、非交換社会であるほど生産＝消費は自明である故に経済の重要性は認識されなかった。アイデア論の始元でありカントも第一批判書で評価しているプラトンから例示していく。本稿は従来の研究の整理と将来の研究の指針のための覚書きであり、扱った諸学説の解釈は、それぞれ解の可能性の一つを探ってみたものである。

1 前近代

1-1 プラトンの *Politeia* は古来「正義について」という副題が付せられているが、これはプラトン自身によるものではない。確かに正義とは何かを中心テーマをなしその問題解決のために国家の問題が考察され、その限りでプラトン自身による書名『国家』より副題の方が却って著作のテーマを適切に表現しているかに見える。だが国家の問題、特に正しい国家としての〈理想国家〉の問題の方が著作の大部を占める。そのユートピアは通説のように単なる理想主義にはとるべきでない。しばしば「正義について」の問題は未解決のままに残されたと言われるが、徹底的な吟味のために何の結論も得られず否定的な結末になったのではない。現実の中では一切が相対的に否定的であらざるを得ず、それら一切を総体として批判するためにイデア的〈国家〉像が描かれるのである。「方法としてのイロニー」がここに活用される。まず正義についての諸見解が論駁された後に求められる(プラトンの記す)ソクラテスの見解では、国家全体と個人個体を類似化 analogixe し個人の拡大したものであるものとしての国家において「正義とは何か」を探究する。国家の発生過程にその正義の起源が見出されるとされるが、問題とされるのは歴史的発生過程ではなく、人間の本性

からする本来アルベキ国家の構成である。言論のうで最初から国家が構成される。ヒトはそれぞれ個体としては非自足的である故、各人は共同して自足的なものとなる、即ち国家を形成する。「分業に基づく協業」体であり、国家はその成長・完成したものからなる。

この国家は全体確定した像として現実の種々な——空間的かつ時間的に——社会・国家の測度基準として要請されたものである。それは「方法的ユートピア」であり、その確定は国家の成長の限界が明示されることによって果たされる。その限界とは「成長しても一つであることを望むところまで」であり、その限界を越えては成長せしめず且つ限界点にまで成長したところの[・]静態社会として「完全に善い国家」が理論の上で建設された。それは有名な三つの徳とそれを担う三つの階級とを持つ。そして国家から個人へと逆に類似化され、人間の魂の三部分とそれに対応する人間の諸徳が考察される。徳（アルケー）とは元来卓越性のことであり、しかも完成されたものを意味する。上記の国家像を測度基準として不完全な国制を論ずる段になる前に、まず共有の問題が論じられ、それは有用でもあり可能でもあるとされる。「全体として一つ」である故に、それを分裂せしめる「私」は悪であり、結合せしめるものが善である。こうして各部分と共同体が全体として確定するものとされる。これとの関連で理想と現実との問題が論じられ、前者はそのまま後者において実現し得るものではないから、国家制度も理想に近いもののみが現実化され得るとされ、この「近いもの」=次善のものが実現しうるための条件として「哲人王制」が主張される。最高の国家は不可能ではないが、至難であることが再び強調されている。

愛知者〔哲学者〕とは何かを論じながらアイデア論を展開していくが、国家像そのものも実はアイデアであり、一切の国制を批判する測度基準として一切の国制に等距離に立ち得る無限遠点に設定された。現実はおよそ相対的でしかありえず、それら全体を[・]綜観して批判し得るために「方法的ユートピア」を基準として「仮設を廃棄しながら、[・]初めそのものへ向って」進み、その「[・]成果を確実にして」いく。ここに弁証法（ディアレクティケー）が働らく。このような国家像は、しばしば誤解されているように、決して全体主義を主張するものでは

なく、あくまでその用途の自覚の上に描かれている。——少なくともソクラテス自身はダイモンの徴〔内心の声〕に忠実に。この像を測度として現実の種々の国制の構造・変遷を把握することが試みられるが、これは『政治家』の中でも行なわれる。

吾々にとってプラトンが生きる道でのプラトン『国家』の解釈をしているのだが、そこから汲取らるべきは種々の社会——それは同時に歴史でもあるのだが——をトータルに批判するための「国家」像構想とその活用という方法論の正しさにある。それが実はカントやマルクスなどにもみられる。その像の中に盛られた内容が彼のおかれた歴史的制約性の故に限界づけられたのもって否定するのみであってはならない。プラトンにあっては、「理想」像とは単に夢想・空想像ではなく、完全ユートピアとしてのと現実可能な最高のものとしてのと二つが区別され、それぞれの意義が考えられている。この区別は例えばマルクスの二つの「自由の王国」像に相当する。

相対を絶対に見通す女神アナクケ〔必然の神格化されたもの〕は、ここから可能となる。

次に *Nomoi* と *Politikos* とは『国家』と共にプラトンの三部作をなす。後者を単なる理想主義の著作とする通説と対応して、前二者は——ともにプラトン晩年の作であるが——理想主義が影をひたためて現実主義の態度が強くなってきたものとする通説も誤謬である。既に『国家』において理想と現実との関連が考慮され、現実理解＝批判のための測度基準としての「方法的ユートピア」が構想された。さしあたりはその構築に主力がおかれていたのが一応プラトンにとって完成されたので、『政治家』『法律』ではそれをもとに現実理解＝批判へと主力が移されたに他ならない。

『政治家』では現実の諸国家がいかにあるかが探究され、理想国家像はそれらの批判のための測度基準として常々背後にある。そこからみて現実可能な政体として最善の方法は法典を設けること、立憲制であるとされる。『国家』にある国制の分類がより詳しく規定され、そこにおける理想国家、即ち法の拘束を受けない「完全な知識による完全国家」が別格とされて、国家諸形態が分類されている。君主制・貴族制・民主制とそれぞれの腐敗態の序列づけをしてい

る⁽⁴⁾。その正否は方法的ユートピアとしての「国家」に盛られた内容と相即し、プラトンのおかれた歴史的状況によってうける制約性と関連する。『法律』では次善の政体として異なった要素の融合・結合をもってするところの混合政体の法治国家が政治理念として支配的となる⁽⁴⁾。しかし決して理想と現実との中道・中庸として理解＝誤解されてはならない。法治国家の組織原理として混合政体が最も固く「法を守る統治」たる次善の国家実現のために主張されている。「次善の国家」とは方法的ユートピアとしての理想国家に比しての次善であって、現実では至高の政治形態であることが想起されてくる。

1-2 一般にプラトンは理想主義者でアリストテレスは現実主義者だとの対比がなされたりするが、単純にそうではなく、プラトンにおいては理念と現実が弁証法的な関係で捉えられている。またアリストテレスにおいても同じく、例えば「人間は生まれながらにしてポリス的な動物である」という有名な規定にしても、「生まれつき」＝自然のままと言う時の「自然」とは成長した果てのものを意味するのであり、現実の人間がそのままという意味ではなく、成長した人間を描いてそれから逆にみれば人間はポリス的＝政治的な動物となるべきものとして生まれるという意味である。成長した果てのものが自然として描かれて、現実にあるものはみなそこへ向かって成長すべきものとして考えられていく。これはマルクスのように、政治的動物を社会的動物と言い換えてみても同じであろう。

またプラトンのイデアとしての社会像を現状と対比させる発想はアウグスティヌスの『神の国』などに受け継がれており、その両者を近代において「ユートピア」の名称の産みの親であるトーマス・モアが継承発展させた。

2 近 代

2-1 批判哲学を樹立したカントと同時代に、スミス⁽⁵⁾は政治経済学の最初の体系化を果たした。現実の資本主義社会の発展傾向からその生成の萌芽を鋭く洞察して、真実の富の世界を即ち「不可視の手」に導かるべき世界を描き、その抽象した社会像をもって逆に、現実の社会の在り方を転倒したものとして、また当時の常識的見解を転倒したものとして批判する。その基準となって

いる社会像が「自然的自由の体系」であり、スミスにおける方法的ユートピアの役割を果たしていた。彼は決して現実の社会が自由放任でうまく営まれていると考えたのではない。ところでスミスの『諸国民の富』期に進行していた産業革命を経て、彼の継承者リカードの『原理』期には産業資本が社会での支配力を確立しつつあった。スミスは現状として資本主義の成立過程の故にもつ矛盾を眼前にして、それを批判の対象として理論と資本主義像を確立した。リカードは資本主義の確立したにも拘らず乃至確立した故にもつ矛盾を現状として持ち、それを批判の対象として原理・資本主義像を確立した。政治経済学はこうして、産業資本の台頭に伴って、漸く一般化した。

リカードの資本主義の擁護も決して単純なる現状肯定ではなく、一方で「正常な」資本主義像を鮮明に描き、他方でその像を基準にして現実の資本主義社会を批判する。「社会発展の初期」論と「正常なる社会状態」——その極は静態社会となるのだが——論とをもって、現状をハサミウチにして批判し政策提唱もしていく。『原理』はマルクスのいう上向法的な体系をもって書かれ、「価値論」から始まって価値・地代・価格・賃金・利潤といった基本的概念が中心として先に解明され、その後でその諸説を基準にしてより具体的な論理の発展として外国貿易論・課税論等が展開される。この体系の記述法が採用される前提として、リカード自身にとってその確究過程での下向が存在した。学者である以前に実業家であったリカードは自身の関係する金融問題、殊に通貨問題から研究を開始し、またマルサスとの論争の中から且つその過程で体系を構築していった。実務的な知識の豊富な彼が、一定の「原理」を把んだところから体系叙述は始まっている。——このことの忘却が『原理』は一面的に演繹的抽象的だとする誤解の源となる。経済知識・問題意識の現実性から現実社会の背後にある一定の社会法則の貫徹を見抜き、スミスの「不可視の手」に学び且つその負った現状の差ゆえの変化を考えにいれて、その法則の自由な貫徹による社会の発展をもたらさんとする。その法則は自由放任に委ねられる時にこそ諸個人の行動が自らそこに帰着すべき自然的秩序であった。現実批判としての役割が忘れられてはならない。その自然法則の類似物が彼の株式取引所での体験から得られ、そのような経済の具体的な動向を念頭に原理への平均的研究を終え

た上で『原理』は抽象的な法則の確立とその展開として表わされたものである。

『原理』は商品の価値の分析から始まっている。交換価値を投下労働によって決まるとし、最終的には「社会発展の初期」（マルクスの言うスミスの「ロビンソン物語」）にのみその妥当性を制限してしまったスミスに反対して、資本主義社会にも投下労働価値説を妥当するとして一貫性を保たせんと試みた。現象論にすぎないいわゆる支配労働価値説からではなく、（社会的）実体論としての投下労働価値説から出発したことは、価値を個別的に規定せんとする彼の意図を越えて「社会再生産」の次元での価値規定を可能にする。そして社会発展の「静止状態」到達の必然性の洞察と、それへ到るスムーズな発展をもたらすべき自然的発達に適う「正常な社会（＝資本主義社会）状態」を明示し、その反面として現実の社会状態を批判した。その「自然的発達」の動向との関連で「自然価格」論も展開されている。例えば労働の自然価格＝労賃は単に労働者の最低生活費ではなく、便宜品をも含んでおり、前者のみでは不正常で経済発展を阻害すると考えられている。資本主義をそのまま一つの自然秩序と考えたわけではなく、逆に自然的秩序に適った資本主義の「自然的行程」を探究したのである。自由競争の主張も決して人為的な作為を否定するのではなく、不作為に「自由競争」に任せてうまくいくようにするにはどう作為すべきであるかを問うたのである。——政治経済学である。

2-2 このスミスやカードの政治経済学を継承すると同時に、カントやヘーゲルの哲学を継承し、それらを発展させたマルクス⁽⁶⁾について、初期マルクスと後期〔成熟期〕マルクスとの関連問題と結びつけて補足的に説明を加えておくことにする。初期と後期とでは哲学から科学への発展ないし退歩としていづれにせよ断絶とのみみるのでもなく、また単純な連続とみるのでもなく、連続性と断続性との二面をもつものとみられるべきである。その両面性とは決して単純に捨てられていく部分と発展的に継承されていく部分とがあったというのみではない。それはマルクスの方法論の確立する過程——当然これは一生を貫いて連続する——における研究の対象分野に主眼点の差がある——これが断絶として映ずる——ということに他ならない。つまり、初期には測度基準としての「方法的ユートピア」の構想の明確化への努力を主になし、後期にはそれ

をより積極的に活用して、人類史殊に資本主義段階の分析に主に努力を注いでいる。むろん方法的ユートピア像の構築とその活用とはそれぞれ相互に深化しあっていくのであり、マルクスの「政治経済学の批判」体系が最も完成された著作である『資本論』フランス語版の時期は同時に、 Kommunismus 像が最も明確に描かれている『ゴータ綱領批判』の時期でもあったことが、それを示す。その後もなお深化されていくべきものであったはずである。『資本論』段階でも第一版と第2版ないしフランス語版では価値の社会的実体論・「自由人の自由共同体」像や「個体的所有の再建」論がより明確化してきている。

マルクスにとっては Kommunismus は二重の役割をもっていた。つまり到達目標としてのそれと「方法的ユートピア」としてのそれとである。——両者はまた不可分に関連しているのだが、彼にユートピア思想が存在しなかったとする解釈は誤解であると同じく、彼が矛盾が完全に消滅することを可能とみていたとする解釈はマルクスをいわゆるユートピアンに貶めんとするものである。批判の測度基準としての完全ユートピアと目標として漸近していくべき社会との区別と、それぞれの意義・役割の認識が果たされねばならない。ところでエンゲルスにはその二重性はなかった。即ち前者の像は不在であった。それでも一層においてはマルクスと協調しあえる面をもつが、しかしそれも他のもう一層との構造的連関なしではかなりの制限をうけざるを得なかった。エンゲルスは単層的性質の理論を持つ。

マルクスの場合あくまで初期と後期とは連続しており、研究の深度の差があるのみである。しかも二層のどちらも連続している。ただ研究の力点の置きどころが異っているのみである。——そもそも個体における認識はおよそ連続するはずのものであるし。ともあれ、マルクスは「方法的ユートピア」としての Kommunismus ——後期におけるその表現の例としては「自由な人間の自由共同体」や「自由の王国」——とそこにおける人間像を測度基準にして、商品経済社会、殊に資本主義社会における矛盾・疎外を明らかにし、また資本主義的政治経済メカニズムを分析している。そしてまた逆に後者の把握の進展が前者の構想を明確にしていくことになる。吾々にとってマルクスを現代に活かし得る道は、「方法的ユートピア」としての Kommunismus の構想の一層の深化とそれ

に基づく「政治経済学の批判」・現代資本主義社会の批判の一層の展開にこそ存すると考えられる。

3 現 代

3-1 社会発展が一層急激化することによって、現代では全体考察の学即ち形而上学を断念し、局部認識にのみ限定する科学化の傾向が著しい。科学としての有効領域の自覚の上でならば、この方向もそれ自体としてはむしろ正しい。しかし形而上学の必要性和可能性を否定するに到るならば誤謬に転化する。経済学においてこの科学化の代表例をマーシャルにおいてみてみよう。マーシャルは後のケインズとともに、経済学を科学としてうち建てんとし、純粹理論とその応用とを合わせ提出している。ただ師マーシャルにおいては純粹理論への傾倒が強く、弟子ケインズにあってはその応用への指向を濃厚にもつ。むしろマーシャルにおいても厳密な科学的研究のもとに改革への情熱が強烈に存し、現に彼は『経済学諸原理』の後に『進歩の経済学』の著述を約したのだが、果たされなかった。その理由はともあれ、そのためマーシャルの場合には純粹理論、純粹経済学の研究が主なる結果となった。——ケインズの場合には政策への志向が初期から強く持たれていた。

政治経済学 *political economy* という言葉を廃し、経済学 *economics* という概念の使用を提唱したのは、彼に始まる。それは経済科学を意味する。経済分析のための新しい分析用具が導入され、経済理論が科学としての次元に純化された。その最も重要な特徴の一つは経済分析に数理解析的方法が広範に利用される先駆けになったことにある。そして彼によって導入された新しい分析用具の他に類をみない豊富さをもって、まさに彼は経済学 *economics*（日本での通称でいえば「近代経済学」）の父と称されるに相応しい。例えば彼の理論の要めともなっている「有機的成長」論の主張は、あくまで純粹理論の枠の中に限定されている。包括的な、それ故ルーズな概念に代えて、「組織」という社会学的概念を経済理論に導入したのも、科学次元に限定されてのことに他ならない。また例えば「分配の正義」についての主張などもその枠内でのみ妥当すべきものであった。著者自らが科学に限定せんとしていたものを、それを

越えて普遍妥当的に主張していたかの如く解釈するは——擁護のためであれ批難のためにであれ——誤謬である。

マーシャルはイギリスの伝統に従って、経済学とは経済的事実を収集・整理・分析すること及び観察と経験から得た知識を応用し、種々な原因の短期及び究極の結果を判断することだとしている。ここに問題となるのは、「究極の結果」に関してである。科学の枠内にあらかじめ限定されているのだから、「究極の結果」というのも当然その枠内での「究極」の結果にすぎないのであり、しかし現実においてその仮設された枠が保たれ続けるという保証のないことが自覚さるべきである。科学とはその枠が保証され易い＝停滞的な歴史段階・社会状況でこそ成り立ち易いと考えるのは誤解である。そのような傾向の強い社会では科学は形而上学から俊別されてはこない。なぜなら全体思考がそこでは容易であり、科学的思考への必要性が切迫しないから。実際は不断の発展、「創造的破壊」(シュンペーター)の過程にある時・所でこそ、時間・空間に一定の制約をつけ仮設したモデルで考察しようとする科学的思考が生み出されて来る。マーシャル自身も述べている如く、急激な産業革命——それより1世紀以前の变革より急激且つ広範な——の間に本書は書かれている。経済学説はそれぞれの社会状態に対応すると、彼自身また述べているが、確かにマーシャルの経済学そのものをも含めて然りである。マルクスがここに想起されてこよう。

ところで科学はその限界が自覚されないまま延長主張されると、仮設内では正しかったものも誤謬に転化する危険を孕む。むろん無自覚ではあっても事実においてその限界内に留まるならばそれは有効性を発揮し続けるであろうが。マーシャルも経済科学を目指す故、連続性の原理を主張し、量の差として問題を立てていこうとするのは当然の志向である。その適例が準地代 *quasi-rent* の創造である。量化しそこに数学を利用する⁷⁾。彼が初めて経済学に微分法の利用を提唱し、且つ実行した。数量的に考える科学はどちらがどれだけと程度で考える点で、質的にのみ正か否かとする思考より長所をもち、現実にヨリ近づきうる面をもつ。しかしそれが成立しうるのは実は成立しうる範囲内に自らを限定させることによって可能となるのである。だから例えば、彼のモットーとも言える「自然は飛躍せず」との主張にしてもそれ自体として正しいか否か

という議論の立て方は、科学についての無理解から生じている。実は飛躍しない範囲内で考察していこうとの意味にこそ把るべきであり、また現実には飛躍も存在しうることを否認するものではなく、それについては留保するという意味に理解すべきであろう。

絶えず「他の条件にして等しき限り」という留保をして、彼は静学から動学へ、動学から（経済）生物学へと拡げていく。そこで到達する「全体」はあくまで量的に拡大していったものだから、いつまでいっても科学の枠は越えられない。定常的状態の仮説も科学次元のモデルである。直接には J. S. ミル等から受け継がれたが、ヨリ科学的にされたものである。マーシャルにあってはそれは発展の究極に描かれるのではなく、「均衡」において成立するとされているのだから。所得に関して社会的視点への移行を説いているが、そこでいう社会全体とは「集計」の意味であり、科学的次元のものである。本書の冒頭で経済学とは富の研究及び人間の研究の一部であるとし、全人としての諸「個体」における経済的側面が他に対して如何なる関係にあるかを問うことなく、ともかくその側面に限定して研究すると言っていることは、彼の科学的な態度を明白に表示している。一切は量的差に還元され、例えば利子と準地代、そして準地代と（差額）地代の間がそうであり、また価値論では定常状態に「代表的企業」の概念を導入し、それを修正して現実に向かう時にもそうである。科学的手法によっている。

マーシャルは経済科学とは純粹理論とその応用との両面を持つとし、**economics** という用語がヨリ相応しいとしている。用語の意味を限定しようとするれば形容詞をつければよく、「政治経済学」とは従って狭義のものだとしているのは問題であるが、それはともかくとして、経済学を科学として諸制約を自覚の上でその内でそれぞれの研究に没頭するのが最善であるとする彼の「方法」論は正当である。この「経済学の領域と方法」も付録の一つなのだが、他に「学説史」なども本文から移されて付録に収められている。マルクスの場合は『資本論』の体系の一部に「学説史」を予定していたし、ケインズの場合は覚え書き的にはあるが『一般理論』の中に「学説史」の項目を入れていたように。

ここでケインズ⁽⁸⁾について少しだけ触れておくと、科学がおよそそうである如く、彼の経済学も純粹理論とその政策的応用との二面をもつが、マーシャルとは対照的に後者への傾斜が著しく濃厚である。ただ彼の場合それを支える知性主義への信奉に特色がある。科学の急激な発展は近代のそれに伴い、また後者と共に科学の応用性が急速に進む。自然科学も社会科学も、さらには数学すら数理科学として純粹数学と応用数学を統一した形で、そうなる。マーシャルからケインズに到って数学利用が経済学でも決定的となり、他の経済学諸潮流と共に計量経済学・数理経済学を生んだ。歴史が過渡である以上科学認識は過渡的でしかあり得ず、ケインズの理論も革命的な成果をもたらしたとしても、却ってそれ故に彼が置かれた社会的歴史的位置が解明されねばならない。それを忘れて普遍化されてはならない。ケインズの書が『一般理論』の名をもって現われようと、その有効領域が吟味されねばならない。それが果たされてこそ、初めて彼の意図を拡張し理論的継承・発展的利用をすることも可能となるだろうから。

3-2 現代でも他方で、全体考察の学の伝統を継承し、マルクスに接続するような理論はむしろ存在する。その例をシュンペーターにおいてみてみよう。『理論経済学の本質と主要内容』『経済発展の理論』『経済学史』がいわば三部作としてあるが、彼の場合も出発点においては経済学の科学としての純化を試行しており、少なくとも彼の意図においては終生それを志向していたと思われるのだが、後の大著『資本主義・社会主義・民主主義』においてはその意図を越えて全体考察の学が窺える。マルクスへの関心は早くからあった。

先ず『本質』について科学としての経済学の基礎づけをみておくことにする。シュンペーターは物理学が力や運動などの実体を問うことをやめたことが今日の成功を収めたと考えて、経済学でも同じことを主張する。数学の使用は控えてはいるが、経済的諸要素の数量間の相互依存関係を、因果関係ではなく相互に原因ともなり結果ともなるその関数関係を(均衡の中で)解析することを「純粹経済学」の根本問題とする。価格現象が理論経済学の対象だとし、それを説明し記述することがその任務だとする。価格関係の基礎に限界効用を考えてはいるが、その原理も決して価値の実体・原因としてではなく、単に説明

のための仮設にすぎないとされる。与件一定の前提・仮定のもとで均衡状態を扱う故、静態論であり、価値論もこの次元のものである。そして分配論の中で利子は静態論からは除外される。そこでは利子(それを含めて利潤)は不在とみなされる。生産の三要素のうち土地と労働——地代と賃金がそこに生ずる——を本源的生産財とみなす故に(ポエムから援用された帰属理論)。利子の発生はそこで動態のもとでのみ求められ、従って彼独特の動態論たる『発展』で扱われることとなる。『本質』は概してワルラスの純粹経済学としての(一般)均衡理論⁽⁹⁾の純化・徹底を意図したものであり、静的均衡論の整備を直接の目的とし同時にその限界づけをしたものである。

シュンペーターは、ケインズと同じく、マルクスの死んだその年に生まれている。彼は純粹経済学の基礎づけから出発したのだが、後には近代経済学とマルクスとの対比では、むしろ後者に接続する面をもっている。そちらの面に多く注目してみたい。近代経済学においては一般に、集計の数量は私的利潤追求の結果の集計にすぎず、マルクスの場合にはこれとは逆に社会の再生産が先行し、これを制御するに必要なものを考察していく。後者は経済学と社会学との総合を果たして、反証可能な実証科学とは異なり現象を批判すべきものとしてある。社会そのものを人類の発端から終末まで見通すものとして、人間学(『経哲草稿』)である。社会の再生産は一定の生産力のもとで遂行されていくが、それは絶えず発展し、しかも革新を伴うものである故に、現象形態としては攪乱された形でしかなされ得ない。マルクスはこれを洞察している。ではシュンペーターの場合にはどうかを、『資本主義・社会主義・民主主義』において、マルクスと対置させながら考察する。そこではシュンペーターはマルクスを念頭において論じていると予想されるのである。

マルクスの基本的問題は「社会の再生産」であり、経済的生産・流通のみならず非経済的生産・流通をも含めて、一切をコミュニケーションにまとめている。そのコミュニケーションは一定の生産力に即して成立する。主題は近代社会即ち資本制的生産様式における経済的運動法則の解明にある。剰余労働の概念もそのために生み出された。シュンペーターのマルクス解釈もそうであり、だが別の形での決定要素があると考え、またかの法則の解明とともにそれを補

足して自己変革の法則の解明を目指している。マルクスの「自由な人間の自由共同体」は社会再生産の明白な図式である。資本制生産は個別的資本の私的利潤追求によって営まれ、社会の再生産については考慮されない。しかし前者を通じて後者が達成される。これはスミスの「不可視の手」やヘーゲルの英雄の考え方に通ずるものがある。英雄とはヘーゲルにとって、個別的私的な存在ではあるが、世界理性をそれ自身発現しており、世界理性の体现者にすぎないものとみなされている。マルクスの「自由の王国」像も空想ゆえに理念のみが持つ最大の牽引力を発揮している。そこでは個々の構成単位は明確であり、全体と個体とがそのまま結びついている。方法的ユートピアである。

シュンペーターは科学として外挿法 **extrapolation** を採用している。それは将来も同じに発展すると仮定し、現状を数的に比例的に拡大させていく方法である。これは全体考察の学にはそのままは正当でないが、それはともかくそれに従えば、すべての人間が被収奪者になる社会が想定されてくる。全員がプロレタリア化することである。傾向則としてはこれは確かに正しく、成長を制御するならば歪みも制御できると考えられている限り、プロレタリア化、労働力への転化は必至である。ただし万人がプロレタリア化ということは両義性をもち、一方で全員が搾取されることは、他方では全員が搾取することであり、全員がブルジョア意識をもっていくことにもなる。したがって万人のブルジョア化ともいえる。それは二重性をもつ。即ち意識のうえでのブルジョア化と機能としてのプロレタリア化とがそれである。成長は未知への突入である故に破壊は不可避である。それを制御するには真には、成長を一定段階で停止させ静態化しなければならない。マルクスの場合、革命とは **revolution** であり、物理的＝非人格的な意味にも解しうる。同じ意味でシュンペーターも革命の日常化を説き、革命を惹起するような心理をいだかした社会物理的な条件を指摘せんとする。しかし、資本主義の完成は一定の生産力での静態化であり、それによってしか完全制御は可能となり得ない。

シュンペーターは社会主義と商業社会とを対比して、後者を私的・私的経営に基づくものとする。むしろ商業社会が資本主義の特殊形態であるかに現われるが、実は前者のうち最も典型的に「私的」なのが後者なのである。商業

- (6) 拙稿「マルクスとエンゲルス——政治経済学批判——」『経済評論』1973年4月号を参照。
- (7) マーシャル自身は数学利用に慎重で、それらは付録にまわしている。
- (8) 拙稿「再生産表式と方法的ユートピア」『一橋研究』第3巻第4号参照。
- (9) ワルラス自身は単に純粹経済学者ではなく、応用経済学への志向も強くもっていた。
- (10) ガルブレイスの *The New Industrial State* とは新しい産業が生み出す状態と理解しえ、状態 *state* とは社会を全体としての構造と変動として把えるものと解し得るならば、その発想はマルクスに接続させることができよう。それは彼自身の意図を越えたものであるかもしれないけれども。
- (11) 他の拙稿での論を前提にしたため説明が簡単になっているところもある。

(著者の住所：武蔵村山市中藤1460 村山アパート92-403)